

アフィン Deligne-Lusztig 多様体の等次元性

高谷悠太

東京大学数理科学研究科

類体論とラングランズ対応

高木と Artin による類体論では,

$$\text{Gal}(\overline{\mathbb{Q}}/\mathbb{Q}) \text{ の指標 } \xrightarrow{1:1} \mathbb{A}_{\mathbb{Q}}^{\times}/\mathbb{Q}^{\times} \text{ の指標}$$

という対応が構成された. ラングランズは類体論の高次元化を考え, \mathbb{Q} 上の簡約代数群 G に対し

$$\text{Gal}(\overline{\mathbb{Q}}/\mathbb{Q}) \text{ の } L\text{-パラメータ } \longleftrightarrow G(\mathbb{A}_{\mathbb{Q}}) \text{ の保型表現}$$

という対応を予想した. 類体論はこの予想の $G = \mathbb{G}_m$ の場合である.

志村多様体

志村多様体 $\text{Sh}_K(G, X)$ は3つのデータ

- G : \mathbb{Q} 上の簡約代数群
- $X = \{h: \mathbb{S} \rightarrow G_{\mathbb{R}}\}: \text{Rep}(G_{\mathbb{R}})$ の“複素構造”
- $K \subset G(\mathbb{A}_f)$: コンパクト開部分群

から定まる代数多様体であり, \mathbb{C} 上の点集合は

$$\text{Sh}_K(G, X)(\mathbb{C}) = G(\mathbb{Q}) \backslash X \times G(\mathbb{A}_f) / K$$

と表される. 志村多様体 $\text{Sh}_K(G, X)$ は代数体 E 上で定義され, l 進エタールコホモロジー

$$\text{colim}_K H_{\text{ét}}^*(\text{Sh}_K(G, X), \overline{\mathbb{Q}}_l)$$

には $\text{Gal}(\overline{E}/E)$ と $G(\mathbb{A}_f)$ が作用する. そのため, 志村多様体のコホモロジーはラングランズ対応の主な源となっている.

Oort の葉層構造とアフィン Deligne-Lusztig 多様体

志村多様体には整モデルがあり, 特殊ファイバーには stratification

$$\overline{\text{Sh}}_K = \coprod_b \overline{\text{Sh}}_K^b$$

と概直積構造

$$\text{RZ}_b^{\text{red}} \times \text{Igs}_b \rightarrow \overline{\text{Sh}}_K^b$$

が入る. これを Oort の葉層構造といい, Mantovan の公式という志村多様体のコホモロジーの計算手法などに応用されている.

RZ_b^{red} は p 可除群のモジュライ空間であり, Dieudonné 加群を用いた分類理論を用いることで, その完全化 $\text{RZ}_b^{\text{perf}}$ が半線形データで表せる. 半線形表示を一般化することで, p 可除群と対応しない場合にも完全スキームが定義され, アフィン Deligne-Lusztig 多様体が得られる.

アフィン Deligne-Lusztig 多様体の定義

アフィン Deligne-Lusztig 多様体 $X_{\mu}(b)$ は3つのデータ

- G : 簡約代数群 $G_{/\mathbb{Q}_p}$ の \mathbb{Z}_p 上簡約モデル
- $\mu: \mathbb{G}_m \rightarrow G_{\mathbb{Q}_p}$
- $b \in G(\overline{\mathbb{Q}}_p)$

から定まる $\overline{\mathbb{F}}_p$ 上の完全スキームであり, $\overline{\mathbb{F}}_p$ 上の点集合は

$$X_{\mu}(b)(\overline{\mathbb{F}}_p) = \{g \in G(\overline{\mathbb{Q}}_p) / G(\overline{\mathbb{Z}}_p) \mid g^{-1}b\sigma(g) \in G(\overline{\mathbb{Z}}_p)\mu(p)G(\overline{\mathbb{Z}}_p)\}$$

と表される. $\overline{\mathbb{Q}}_p$ は \mathbb{Q}_p の最大不分岐拡大の完備化であり, その整環を $\overline{\mathbb{Z}}_p$, Frobenius 自己同型を σ とする.

	$\overline{\text{Sh}}_K^b$	$X_{\mu}(b)$
代数群	$G_{/\mathbb{Q}}$	$G_{/\mathbb{Q}_p}$
指標	X : miniscule	μ : arbitrary
レベル	K	$G(\mathbb{Z}_p)$
分類対象	アーベル多様体	p 可除群の Dieudonné 加群

$\overline{\text{Sh}}_K$ に比べ $X_{\mu}(b)$ は群論的に定義されており扱いやすい. 修士論文では $X_{\mu}(b)$ の既約成分について研究を行った. b の σ 交換子群

$$J_b(\mathbb{Q}_p) = \{g \in G(\overline{\mathbb{Q}}_p) \mid g^{-1}b\sigma(g) = b\}$$

は $X_{\mu}(b)$ に作用する. この作用に関する $X_{\mu}(b)$ の既約成分の軌道が Mirković-Vilonen サイクルを用いて表示されることが予想されていた.

Chen-Zhu 予想

$$J_b(\mathbb{Q}_p) \backslash \text{Irr}(X_{\mu}(b)) \cong \text{MV}_{\mu}(\lambda(b))$$

最大次元の既約成分に制限すれば [Nie22] において Mirković-Vilonen サイクルへの全単射が構成されていた. そのため, 修士論文では次の結果を示し, 系として Chen-Zhu 予想を得た.

主定理

$X_{\mu}(b)$ の既約成分の次元はすべて等しい.

アフィン Deligne-Lusztig 多様体は $\mathbb{F}_p((t))$ などの等標数の局所体上でも定義される. 等標数での $X_{\mu}(b)$ の等次元性は [HV12] で証明されている. 主定理の証明では, [HV12] を混標数の局所体上に言い換え, Oort の葉層構造の局所類似を構成することを目標とした. Sh_K の各点での完備化が p 可除群の普遍変形になることを利用すると, 以下が期待される.

局所葉層構造

各点 $g \in X_{\mu}(b)(\overline{\mathbb{F}}_p)$ に対し $b' = g^{-1}b\sigma(g)$ に対応する “ p 可除群” の普遍変形環を $\mathcal{D}_{b'}$ とする. $\mathcal{D}_{b'}$ の閉 Newton stratum \mathcal{N} への有限全射

$$X_{\mu}(b)_{/g}^{\wedge} \widehat{\times} \text{Igs}^{\wedge} \xrightarrow{\text{fin.surj.}} \mathcal{N}$$

を局所葉層構造という.

等標数の場合に比べ, 混標数では次のような問題がある.

- 等標数では $X_{\mu}(b)$ は $\overline{\mathbb{F}}_p$ 上有限型だが, 混標数では完全スキームである. そのため, 完備化 $X_{\mu}(b)_{/g}^{\wedge}$ が自然には定義されない.
- “ p 可除群” に対応するシュトゥーカは, 等標数では任意の標数 p のスキーム上で定義される. 一方で, 混標数では完全スキームに対してのみ定義されるため, 普遍変形環 $\mathcal{D}_{b'}$ が自然には定義されない.

完全スキーム $X_{\mu}(b)$ の完備化

$X_{\mu}(b)$ の g における deperfection をとり, その g における完備化の perfection として $X_{\mu}(b)_{/g}^{\wedge}$ を定める. つまり,

$$X_{\mu}(b)_{/g}^{\wedge} = (\text{RZ}_b^{\text{red}})_{/g}^{\wedge, \text{perf}}$$

が成立するよう定める.

“普遍” 変形環 $\mathcal{D}_{b'}$ の構成

以下の図式に沿った b'^{-1} の適切な持ち上げ t を構成し, $t^{-1}\sigma$ が定めるシュトゥーカを $\mathcal{D}_{b'}$ 上の “普遍” 変形とする.

$$\begin{array}{ccc} & & LG = G(W(-)_{/p}^{\wedge}) \\ & \nearrow t & \downarrow \\ \mathcal{D}_{b'} = (\text{Gr}_{\leq \mu-1})_{/b'}^{\wedge} & \longrightarrow & \text{Gr} = G(W(-)_{/p}^{\wedge}) / G(W(-)) \end{array}$$

完全スキームの圏では普遍変形の特徴付けができないものの, 具体的な構成から $\mathcal{D}_{b'}$ 上の変形の性質を抽出することができる. この性質を用いて, 局所葉層構造の類似を構成した.

局所葉層構造の完全類似

Igs^{\wedge} に対応するアフィン空間の1点完備化 \mathcal{I} に対し,

$$\begin{array}{ccc} & \tilde{\mathcal{N}}^{\wedge} & \\ \text{adic} \swarrow & & \searrow \text{"fin.surj."} \\ X_{\mu}(b)_{/g}^{\wedge} \widehat{\times} \mathcal{I} & & \mathcal{N} \end{array}$$

という対応が存在する.

ここで, \mathcal{N} は完備局所ネーター環の perfection, $\tilde{\mathcal{N}}^{\wedge}$ は \mathcal{N} と次元が等しい完備局所ネーター環の perfection の完備化である. 完備化をとると位相的にも $\tilde{\mathcal{N}}^{\wedge}$ はネーターでなくなってしまうが, $X_{\mu}(b)_{/g}^{\wedge} \widehat{\times} \mathcal{I}$ への射を構成する上で完備性が必要となった. この対応における adic 射は, 完備局所ネーター環の間の有限射を perfection や完備化と整合的に一般化したものとみなすことができ, 適切な次元理論の下で次元の評価を与える. 特に, この対応から

$$\dim X_{\mu}(b)_{/g}^{\wedge} + \dim \mathcal{I} \geq \dim \tilde{\mathcal{N}}^{\wedge} = \dim \mathcal{N}$$

を得る. $X_{\mu}(b)$ と \mathcal{I} , \mathcal{N} の次元は明示的に計算できるため, この評価から $X_{\mu}(b)$ の各点の次元が全体の次元と一致することが従う.

[HV12] Urs Hartl and Eva Viehmann, *Foliations in deformation spaces of local G -shtukas*, Adv. Math. **229** (2012), no. 1, 54–78.

[Nie22] Sian Nie, *Irreducible components of affine Deligne-Lusztig varieties*, Camb. J. Math. **10** (2022), no. 2, 433–510.